

コロナ禍における初年次教育科目「学術文章作法Ⅰ」の対応

関田一彦¹・佐藤広子²

創価大学

A Brief Report: How We Managed Our Online Academic Writing Course for First-Year Students

Kazuhiko SEKITA · Hiroko SATO

Soka University

1. はじめに

新型コロナウイルス感染拡大を受けて、創価大学では、2020年3月4日に公式ホームページにて入学式の中止、3月13日に授業開始日を当初予定の4月2日から4月13日に変更することを発表した。4月13日の週は一部授業をオンライン先行授業とし、準備の整った授業から開始させ、4月20日から全授業をオンラインで行うこととなった。この決定を受け、全学必修の初年次教育科目である「学術文章作法Ⅰ」も4月13日からオンライン授業開始、春期は全14回の授業を行った。本稿はその授業実践報告である。

2. 授業の概要

「学術文章作法Ⅰ」は、全学必修の共通科目である。春期に経営・文学・理工・看護の4学部、秋期に経済・法・教育の3学部で開講しており、専任教員11名(准教授2名、助教9名)が担当している。各学部のプレースメントテストの成績を元にクラス間の国語力が均等になるよう、20名前後のクラスが作られている。2020年度入学生のプレースメントテストは新型コロナウイルス感染防止対策としてオンラインで行われた。オンラインテストの結果でクラス分けを行い、春期は36クラスが開講された(その他に、再履修クラスと留学生クラスが合わせて8クラスある)。

「学術文章作法Ⅰ」は、担当者全員が同じシラバスに沿って進める。この科目は、大学生として、レポートを書く作業を通して、様々な事柄を批判的、多角的に検討し、そこから生まれる自分の考えを適切に他者に伝える力を身につけることを目的としている。授業の目標は、大学で求められるレポート課題に取り組む際の基礎技能の養成である。具体的な到達目標としては、以下の9項目が示されている。

1. レポートに必要な情報を文献から読み取ることができる。
2. レポート作成の手順を理解し、手順通りに作業を進めることができる。
3. レポートに適した学術的な文章表現ができる。

¹ 創価大学教育学部 sekita@soka.ac.jp

² 創価大学学士課程教育機構 shiroko@soka.ac.jp

4. レポートの基本的なルールを理解し、守ることができる。
5. パラグラフライティングを意識し、読み手に明確に伝わるレポートを書くことができる。
6. 推敲する習慣を身につけ、実行することができる。
7. 文献や資料から著者の指摘や主張を理解し、適切に引用することができる。
8. 自分なりのテーマと視点を設定した上で、体系的に論述することができる。
9. 様々な文献をクリティカルに読み、多面的なレポートを書くことができる。

以上の目標に加えて、初年次教育科目として、計画的に学習する習慣を身につけることもねらいとしている。

共通シラバスの授業計画は、書くプロセスに従って組み立てられている。書くプロセスは図1のようにライティングサイクルとして示し、毎回サイクルのどこにいるかが学生たちに分かるように説明している。このライティングサイクルを半期で2巡する。1巡目前半の3回は共通の課題図書(2020年度は山田昌弘『少子社会日本』岩波書店2007)を読み込み、8回目までに与えられたテーマ(2020年度は「少子化」)に関する1500～2000字のレポートを完成させる。この中間レポートを書く過程で学術文章に必要な作法を一通り学習できるように計画している。2巡目は自らテーマを設定し、学術文章の作法を確認しながら2500～3000字のレポートを書くことを設定している。各回の主な学習活動は表1の通りである。

授業のやり方は各授業担当者に任されているが、学生が書き手としての気づきを得られるようアクティブラーニングで行い、対話を重視する方針は共有されている。対面授業の時は、

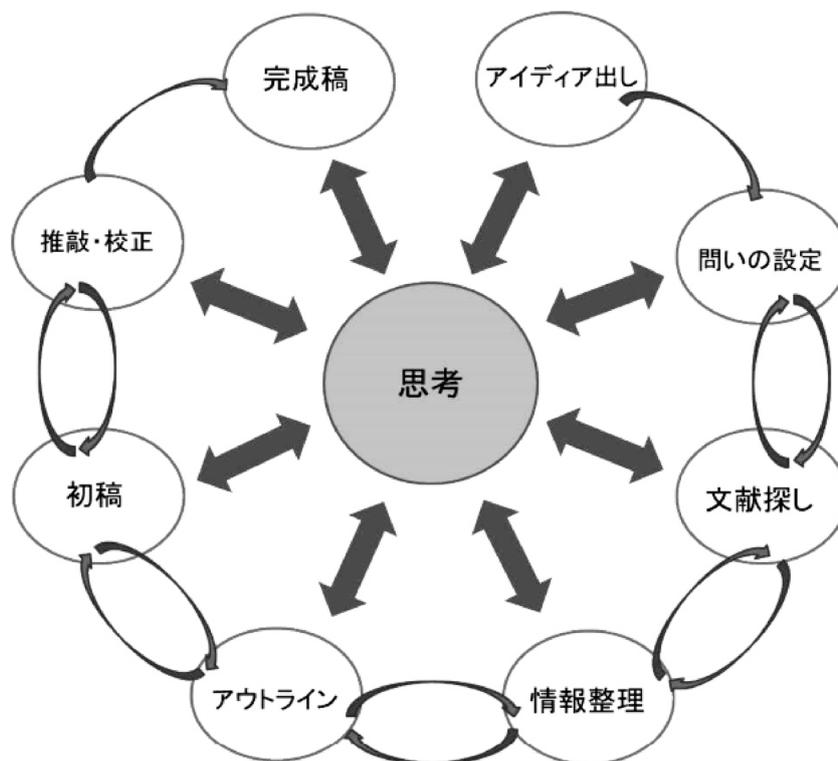


図1 ライティングサイクル

表1 各回の主な学習活動

第1回	ガイダンス
第2回	テキスト要約と パラグラフライティング練習
第3回	
第4回	情報検索と引用練習
第5回	問いの立て方
第6回	アウトラインの作成
第7回	中間レポート初稿提出・推敲
第8回	中間レポート完成稿提出
最終レポートアイディア出し	
第9回	問いの設定
第10回	情報検索・整理
第11回	アウトライン作成
第12回	アウトライン修正・ ピアレビュー
第13回	
第14回	最終レポート初稿提出・推敲
(第15回 最終レポート完成稿提出)	

各担当者がそれぞれ工夫して、学生同士の対話が深まるグループワークを種々組み込んできた。グループワーク時の学生ひとり一人の様子を観察しながら、必要に応じて個別の働きかけも行うことができていた。オンライン授業になることが決定した時、担当者たちが最も不安に感じたのは、この内容をそのままオンライン上でできるかどうかであった。オンラインにおいて、対話的な学びが起きるようにしつつ個別のフォローをどう行ったか、授業担当者11人で行った工夫については次章以降で紹介する。

3. オンライン授業を支える仕組み

オンライン授業導入にあたり、まずは大学側の環境整備が急ピッチで進められた。3月末全教員に Zoom のアカウントが発行され、利用説明会が開かれた。同時にポータルサイトに「オンライン授業特設ページ」が開設され、学生へのオンライン授業告知がしやすいようにポータルの機能が改善された。また、教育・学習支援センター(本学のFD担当部署)の授業支援サービスが始まり、オンライン授業づくりの参考になる様々な情報が発信されるようになった。

学術文章作法 I 授業担当者間では、Zoom 上で定期ミーティング、テーマ別ミーティングを行うこととした。学術文章作法 I の授業担当者は、本学のラーニングコモンズ SPACe にある日本語ライティングセンター(以下 JWC)の業務も行っている。毎週火曜日に学術文章作法 I と JWC に関する議題で全員ミーティング、水曜日に JWC のオンラインサービスに関わる議題で助教ミーティング、金曜日に学術文章作法 I の再履修クラス担当者ミーティングが行われるようになった。定期ミーティングの他に必要に応じてテーマ別ミーティングもできるだけ行うようにし、オンライン上での担当者間の意思の疎通を図った。

ミーティングとは別に学術文章作法 I の授業担当者は、テキストで日常的に意見交換できる場を SLACK 上に開設した。SLACK はテーマ別にチャンネルを作成することができる。全員で共有したチャンネルは、「Zoom 体験会」「授業関係・アイディア共有等」「何でもハウレンソウ」である。「Zoom 体験会」では、日程の合う教員同士でホストを交代しながら模擬授業形式で数回体験会を行い、わかったことを共有した。「授業関係・アイディア共有等」にはコーディネーターである本稿第二筆者が毎週の授業に間に合うようにスライドをアップし、各授業担当教員が好みに合わせてカスタマイズできるようにした。他にもアイデアを思いついた教員が自由に書き込み、賛同した教員で実践を試みるなど、このチャンネルは12月現在に至るまで、より良い授業を協同で工夫する場としても機能している。「何でもハウレンソウ」は気づいたこと、困ったことがあればすぐに書き込み、書き込みに気づいたメンバーがコメントする即時性が発揮された。

4. オンライン授業の実際(第二筆者の実践を例に)

オンライン授業初回は、事前収録したガイダンス動画を全クラスに配信した。ガイダンスの内容は、共通シラバスと授業ルールの説明である。共通シラバスの概要は2に書いた通りである。共通シラバスに授業はアクティブラーニングで行うことが明記されている。アクティブラーニングでお互いに良く学び合えるようにするためには、クラスを安心して発言できる空間にする必要がある。そのために学術文章作法Iでは、「傾聴」「共感」「承認」の授業ルールを設けている。「傾聴」は耳だけでなく、心も相手に向けることである。その向けた心で相手がどんな気持ちで話しているかまで感じ取り、「共感」する。そして、相手が話してくれたことを尊重し「承認」する。「なるほど、あなたの考えは～ですね」と受け入れてから、自分の考えを述べる。オンラインの環境であるからこそ、対面の時以上にこの授業ルールは重要であると強調した。最後に、課題図書を使ったワークシート課題を与えた。加えて、ガイダンスで分かったこと、感想、質問を記入した振り返りを提出するように伝えた。初回から課題、振り返りを行うことを習慣づけるためである。

オンライン授業の第2回以降はZoomを使った同期型の授業を前提とした。Zoomの授業で学生に最初に伝えたのは、ビデオとマイクの使い方である。ビデオはバッテリー消費量が多いので、特にスマートフォンで参加している学生には残量の確認を促す必要がある。授業で教員が講義をしている時はビデオはオフ、グループワークの時はオンにするように指導した。マイクは通常はミュートにし、発言する際にミュートを外すようにした。次に伝えたのは、チャットと反応ボタンの使い方である。チャットは、テキスト購入の有無から始め、穴埋め問題や質問に対する答えなど、ほぼ毎回全員に書き込んでもらうことにした。チャットの書き込みで出席にすることを伝えておくと、学生が入室後に画面から離れるのを防ぐこともできる。反応ボタンは「いいね」と「拍手」を状況に応じて使い分け、積極的に押すように伝えた。

Zoomの授業は、毎回必ずブレイクアウトセッションを組み込むようにデザインした。基本形は前回の振り返り→本時の目標理解→講義→ブレイクアウトセッション(グループワーク)→全体共有である。グループワークの課題は前の時間の終わりに個人課題として提示し、授業参加時まで個人ワークを十分に行うことを促した。グループワーク中は話し合いの雰囲気を見るため、授業者は各ブレイクアウトルームを巡回した。回によっては、Googleのアプリであるスプレッドシートやジャムボードに話し合いの記録が残るように工夫した。こうすることで、授業者はメインルームから移動しなくとも活動の状況を知ることができる。また、学生同士が他のグループの記録を共有することもできる。

第12回、13回は同時展開している別のクラスと合同し、いつもとは違うメンバーとのブレイクアウトセッションを行った。内容は詳細版アウトラインのピアレビューである。詳細版アウトラインとは、序論のテーマの背景、問題提起、全体の予告、本論のパラグラフのトピックセンテンス、サポーターセンテンスで引用する文献、結論の主張、今後の課題・展望を箇条書きにしたものである。違うクラスのメンバーと組み合わせた3~4人ずつのグループに分かれ、自己紹介の後、司会とタイムキーパーを決めてからスタートした。一人の持ち時間は発表5分、質疑応答8分、計13分である。発表者は自身の詳細版アウトラインを画面共有して説明、メンバーは特に論の一貫性に着目して聞き、質疑応答を行った。

個別のフォローについては、大学のポータルサイトと Zoom を活用した。ポータルでの個別フォローとして最も多くのクラスで採用されたのは、アンケートによる振り返りである。アンケートは、300字程度の振り返りの文章に対して、個別にコメントが返しやすいシステムになっている。公開の振り返りや情報交換には、フォーラムが多用された。ZOOM 上では、授業終了時に個別相談希望の学生にブレイクアウトルームを個室として与え、授業者が回って面談を行った。また、授業外でもメールで予約して個別相談ができるように配慮した。さらに授業担当者以外による個別レポート作成支援サービスとして、JWC のオンラインチュータリングも ZOOM 上に 1 日平均 10 セッション枠を設けた。

5. 成果と課題

最も大きな成果として、前年度と比較して学生の成績が伸びたことが挙げられる。第二筆者のクラスに限っても、2020 年度春期はレポート点、日常点の合計が 80 点以上の学生が全体の 46% (2019 年度は 31%) となった。全体としては毎時間の出席率も良く、課題の提出率も良かった。レポートも例年に比べて質が向上していたと評価できる。これは、コロナ禍により外出が制限された分、授業課題に取り組む時間が増えたためではないかと推察できる。実際に大学が無記名で行う期末授業アンケートの結果、授業外学習時間の平均が 3 時間 30 分 (2019 年度は 3 時間) に伸びた。他に 2020 年度から導入した Turnitin という剽窃チェックサービスの効果も大きかったと考えられる。レポートの初稿の段階から Turnitin に提出させることにより、類似度を見ながら適切に引用しているかどうか学生自身が気を付けて確認する様子が見られた。

オンライン上のグループワークは当初心配していたよりも対話が活性化していた。10 クラス合同で行ったアンケートでは、「自分はコミュニケーションが高い方だと思う」の項目に対して、初回は「当てはまる・少し当てはまる」と答えた学生が 34% だったが、15 回は 45% に増加していた。毎回の授業振り返りでは、各クラスとも「みんなと大変さを分かち合うだけでも気持ちが楽になる」「第三者の意見をもらうことで新たな気づきや改善点を見つけることができる」等の記述が多く見られた。対面で会えないからこそ、授業のグループワークでの関りは貴重ととらえている学生が多いと考えられる。また、対面でのコミュニケーションが苦手な学生も、ビデオオフで音声のみ、さらにはチャットのみであれば参加しやすい様子が見られた。

一方で、欠席が多くなり連絡の取れなくなった学生も一定数存在した。2020 年度春期は授業時数の 3 分の 1 を超えて欠席した学生が前年度の 2% から 4% に倍増した。理由としては、昼夜逆転など生活リズムの乱れ、オンライン疲れによる心身の不調等が考えられる。困難を感じている学生を早い段階で発見し、適切に働きかけるにはどうすればよいか今後の課題である。

付記：第一筆者は共通科目を束ねる学士課程教育機構の副機構長として、また課外でレポートライティング支援を行う総合学習支援センターのセンター長として、本学初年次における文章力向上プログラムを統括している。第二筆者は文章力向上プログラムのコーディネーターとして、実際に授業や課外サービスを担当し、コロナ禍での対応を進める中心者である。